

論説

通渭社火* —中国農村の正月儀礼と燃灯儀礼についての一考察—

荒見 泰史

はじめに

本稿では、かつて筆者が調査を行った「通渭」という中国の一地域に長く残されていた「社火」の調査記録を整理し、そうした一連の伝統的正月行事が、歴史的発展の流れの中に如何に位置づけられるかを考えてみたいと思う。

ここに言う通渭とは、現在は中国甘肅省定西市に属する県で、甘肅省東部の山間部に位置し、地理的には甘肅省第二の都市天水と定西の間にある。

通渭の歴史は古く、「平襄」、「平相」の名で漢代以来、歴史に登場する。通渭という今日の名は、宋の熙寧元年（1068）に朝廷から与えられた要塞の名称、「通渭堡」に由来する。当時は吐蕃や続く西夏によって現在の通渭県の中心一帯までが占領されていたため、治平四年（1067）に異民族の居住する地域と河を隔てた東側の地に西に対する拠点となる鶏川寨が置かれたのである。翌年の熙寧元年にはこの鶏川寨をもとに鶏川堡へと発展させ、渭水に通じる堡（とりで）として「通渭堡」の名が与えられたという。この堡は現在も「鶏川古城」としてその跡が残されている。

近代以降、最初の鉄道は山間部を避けて渭水沿いのルートに建設されたため、山間部の街、通渭はしばらく発展から取り残されることになった¹。しかしその分、古くからの伝統が残されてきたとも言われる。

旧正月の「初一」から十五日の「元宵節」までの2週間は伝統的な宗教儀礼を残した「社火」活動の期間として位置づけられてきた。社火というのは、後述するように宋代には名称が残される、節句などの日に村の神を迎えて様々な舞楽、戯劇を披露する中国民間の伝統行事である²。今日の社火の多くは旱船舞³、獅子舞、高蹺、龍舞、秧歌舞⁴などの舞を中心に街中の広場などで行われることが多いが、この通渭では、正月の社火は、依然として昔から

の方式により農村で行われていた。その特徴的な点は、夜間に行われること（一説に「黒社火」と言う）、獣面をかぶって松明と鞭の音に拠る魔よけを行い、土地の神を祀る儀礼を行い、その後に旱船舞、獅子舞、秧歌舞が演じられるというものである⁵。

またその一連の正月の行事の中では日をかえて皮影戲（影絵劇）も行われてきた。通渭では民間劇としては秦腔の伝統を長く受け継いでいるが、山岳地帯でもあるため、劇の形式としては5人くらいで移動の容易な皮影戲の形式で普及し、通渭の人々の生活に根付いてきたという。2002年に初めて調査に出かけた時もこの地では電気が通じてまだ3年足らず、テレビの普及も始まったばかりという時期で、皮影戲は地元では重要な娯楽ということだった⁶。調査では皮影戲芸人の何青章氏宅を訪問し、この地域の皮影戲について話を聞くことができたほか、日の光を利用した「日影子」という方法で「撒金錢（迎神）」と「送神」の段の撮影を行うことができた⁷。

本稿では、こうした甘肅省通渭県でかつて行われていた伝統行事の調査時の記録を整理しつつ、これらが中国伝統行事の中でどのような脈絡によって伝承されてきたのか、古典文献に見られる記載と比較しつつ検討を行ってみたいと思う。筆者は、最近中国の正月行事と火、燃灯などの関係につき考察を行っているが、本稿もそうした一連の研究の一部に加えておきたいと思う次第である⁸。

1. 通渭の社火

社火というのは、古くは宋・孟元老（不詳）『東京夢華録』（1147年）や、宋・范大成（1126-1193年）『上元紀吳中節物』、そして宋代の禪宗の資料などに見られるようになってくるところを見ると、この時代に使い始められた概念のようである。同じ宋代の陸游「遊山西村」にも「春社」として関連する記載も見えており、この行事と「社」との関係が推測されるところである。

その少し前の10世紀初頭頃には民衆の互助組織、結社である「社」が多く登場していることが知られており、社の単位で祭祀儀礼を行うようになっていたことがわかっている⁹。筆者もかつて「女人社」のような女性の互助組織での正月の行事について触れたことがある¹⁰。それらの資料より見ると、

社が正月の上元を中心とする燃灯行事に関わるとする資料も多く、またそうした行事での賑わいの意味も込めて「火」の字が充てられたのではないかと推測している。つまり、五代から宋代にかけて、そうした民間組織での「火」、正月の華やかな祭祀とそれに伴う歌舞音曲を指す言葉として「社火」という語が使われるようになったと思えるのである。

宋・范大成『上元紀吳中節物』に言う¹¹。

輕薄行歌過、顛狂社舞呈。民間鼓樂謂之社火、不可悉記、大抵以滑稽取笑。

輕薄にして行の歌は過ぎ、顛狂にして社の舞は呈さる。民間の鼓樂、之を社火と謂ふも、悉く記す可からず。大抵は滑稽を以て笑ひを取るなり。

この『上元紀吳中節物』に詳しく上元の燃灯行事が記される中で、社の行事については「輕薄にして行の歌は過ぎ、顛狂にして社の舞は呈さる」といい、さらに范大成の自注とされる部分にはそれを「社火」と呼ぶことが記されているが、社火については「悉く記す可からず」と詳細に記すことを憚っている。しかしこれによってまずわかることは題名に「上元」つまり正月十五日としているので、古来、燃灯行事が行われ、隋代頃から踏歌や雑技なども行われ、唐代には夜禁の例外として扱われ、国家儀礼としても行われてきた正月行事と一脈繋がる行事とわかる¹²。宋代には社によって行われるものについては「社火」と称し、滑稽戲などまで織り交ぜて行っていたということであろう。

ここに「火」字を用いているのは、先にも言うように正月の燃灯儀礼との関係が推測される。一時は国家的行事として制度化され、仏教の悔過も行われ、歌舞音曲を楽しんだ伝統的燃灯行事が、次第に社の人々の集まりの中で行われ、中には火の明かりを使って夜に演じられる皮影戲も披露された正月の賑わいを象徴的に「火」で表されるようになったものが、社火の命名に関係したと考えられるのではないか。

これに関する敦煌資料としては、例えば S.527「顯德六(959)年正月三日女人社社条」がある。これは正月になって新たにこの女人社の規定が確認され、構成員の署名を記す文献だが、この規約には正月の燃灯に関わると見られる以

下の記録がある¹³。

一、社内正月建福一日、人各税粟壹斗、灯油壹盞、脱塔印砂。一則報君王恩泰、二乃以(与)父母作福。

一つ、社内にて正月に建福一日す。人は各ぞれ粟一斗、灯油一盞を税め、印砂を脱塔せよ。一には則ち君王の恩に泰く報ひ、二には乃ち父母の与めに福を作すなり。

ここでは明確に上元の燃灯儀礼としてはいないが、当時の敦煌では正月元旦から一連の行事が始まっていること、そうした中で構成員各人に「灯油一盞」を求めていること、正月八日或いは十三日、十四日、十五日の六斎日の日に敦煌の或いは莫高窟で行われるとされる「印砂（仏、塔）」の行事を含むことなどから¹⁴、これもこの女人社が敦煌の燃灯行事に関わったことを知ることができるのである。

こうして燃灯儀礼は 10 世紀頃から社の活動とつながり、「社火」と呼ばれるようになったと推測される訳である。

その社火の宋代における具体的な様相は宋・孟元老『東京夢華録』に詳しい。

『東京夢華録』ではこの社火について以下のように言っている¹⁵。

天曉、諸司及諸行百姓献送甚多、其社火呈於露台之上。所献之物、動以万数。自早呈拽百戲如上竿、趯弄、跳索、相撲、鼓板小唱、鬪鷄、説諢話、雜扮、商謎、合笙、喬筋骨、喬相撲、浪子雜劇、叫果子、学像生、倬刀装鬼、研鼓牌棒、道術之類、色色有之、至暮呈拽不尽。

天曉にして、諸司及び諸行、百姓、献じ送るもの甚だ多し。其の社火、露台の上で呈らる。献ぜらる所の物、動もすれば万の数を以てす。早く自り百戲を呈られ拽かるるは上竿、趯弄、跳索、相撲、鼓板小唱、鬪鷄、説諢話、雜扮、商謎、合笙、喬筋骨、喬相撲、浪子雜劇、叫果子、学像生、倬刀装鬼、研鼓牌棒、道術の類の如くして、色色之れ有り、暮に至るも呈られ拽かるるもの尽きず。

「天曉にして、諸司及び諸行、百姓、献じ送るもの甚だ多し」というのは夜明けから「諸司（様々な役所）」及び「諸行（様々な業種）」、庶民から非常に多くのお供えがあることで、「其の社火、露台の上で呈らる。献ぜらる所の物、動もすれば万の数を以てす」と「社火」が行われるのが「露台」と野外の舞台で、それに対する供え物が膨大であることを言っている。そこで行われる百戯についても詳細が記されるが、今日では推測を出ないものも多い。上竿と言うのは敦煌壁画にも見られる竿登りという一種の軽業で、跳索は綱渡りの類、格闘技としての相撲は『隋書』にも見られている通りである。「説譚話」は戯れの話进行こと、「雑扮」は狂言のようなものと言う、「商謎」は謎解きのようなものであろう。このような催しが夜にまで続くという。

『東京夢華録』のこの記載では、燃灯は見られずまた日中の行事となっている。実は『東京夢華録』では社火とは言うが、六月二十四日の灌口二郎神の生誕節の行事となっているのである。つまり南宋時代に下ると社火は正月の燃灯行事だけに留まらず、社の行う催事を広く指すようになってい、と見ることができる。この場合の「火」は燃灯の意味は薄れ、人の集まる賑やかな行事という意味で主にとらえられるようになっていったということになる。今日も中国の広い地域で行われる社火の多くは早船舞、獅子舞、高蹺、龍舞、秧歌舞などの舞を中心に街中の広場などで正月上元を中心としながらも、生誕節などの庙会など、ほかの時期に社火と称して行われている地域もある。

そうした中で、通渭の鶏川郷、碧玉郷などの山の中では、上述のように、正月上元頃に依然として古い獣面をかぶって火と鞭の音に拠る魔よけを行い¹⁶、土地の神をまつる儀式を行っているが¹⁷、このうち正月の夜に火を用いることは、後の燃灯会にも通じるもので、その由来はさらに遡り、六朝梁の民間行事でも行われている¹⁸。獣面をかぶるのは儼戯ではよく見られるものであろう。儼戯は、疫病退散、神への感謝を主とする儀礼で、周の時代にははじまるとされ、漢や唐などでも盛んにおこなわれた記録が残っている。古来民間にも浸透し、少数民族地区にいたるまで広く盛んに行われたものだが、民間層に浸透したものがこのように伝承されていることは興味深い。鞭を使

うのは弓の弦にも通じるもので、やはりこうした儺戯の流れによる。疫病や邪神を払うことから神鞭などと呼ぶ地域もあるという。農地や大地を飛び跳ね地に膝をつく動作も見られたが、これは中国ばかりか日本でも儀礼として各地に残されている。その意味については民間には様々な説があるようだが、単純に「春の躍動を大地に伝え、疫病や邪神を払い土地の神を迎え、平安な生活と豊作を祈る」という点では共通している¹⁹。

こうした疫病、邪神を払った後、村の入り口で村の長老が天地を祭り、符印を焚き、地に酒を献じて、舞楽隊を村に引き入れる。その後で早船舞、獅子舞、秧歌舞が舞われるというのはほかの多くの社火と同じである。

早船舞の「早」は、水がないくらいの意味で、陸の上で船を踊らせる意味になる。基本は船の先導をする「艚公」と船の中にいる「船娘子」との掛け合いで船が波の上を進むような動きの滑稽な踊りである。船は鮮やかな色の紙で作られた造花や灯籠などが飾られた 2 メートルほどの張り子で、「船娘子」役の一人がそれをかぶって操作し、「風調雨順（天候の順調）」や「大吉大利（幸運）」を祈願する意味合いが込められるという²⁰。

獅子舞は日本でも馴染みのある踊りである。獅子は吉祥の神獣とされ、中国では漢代ころに起源を求めることができる古い踊りである。とくに正月に踊られるのは日本と同じだが、中国ではアクロバティックな動きが好まれることから競技にもなっており、正月以外でも結婚式などのお祝いの時には呼ばれて舞われることもある。生活の中での「避邪」と「吉祥如意、事事平安（すべてが平安無事で幸福であること）」を祈願するという²¹。

秧歌舞はまた単に「秧歌」とも言う。「秧」は苗そのものやそれを植える動作を表す言葉で、人々の農耕に関わる労働を歌にしたものといわれる。南宋・周密の『武林旧事』には「村田楽」として見られるのがその源流とされ、清・呉錫麟『新年雜詠抄』に「秧歌，南宋灯宵之村田楽也（秧歌とは、南宋灯宵の村田楽なり）」ともいわれ、元宵節に村々で踊られていたことが知られている。またその関係から仏教の燃灯儀礼の中にもこうした要素が見られていることも事実である²²。各地でそれぞれ発展した形となっており、歌だけではなく踊りを合わせたもの、劇を合わせたものなどが見られるため、地域によって若干概念が違い、「早船舞」などの一連の踊りを含めた行事を「秧歌」

という地域もあるという。いずれにしても、農業活動とは結びつきが深く、豊作を願うものとして踊られてきたものと考えられる。通渭では、秧歌は村の子供ばかりが集まり、とくに女の子が色とりどりの色彩鮮やかな服を着て手には花で飾った灯籠を持ち、輪になって踊る姿はとても華やかであった。

以上、通渭での社火の活動について若干紹介してみたが、ほとんどが地元の少年少女が中心になり、その段取りから演出までが相談して行われ、村の一軒一軒を夜中まで回って紅包（ご祝儀）をもらい、子供たちの重要なお年玉にもなっているという。ただ、宗教儀礼の部分は村の長老が行う伝統的しきたりに基づくものとなっており、伝統行事として行われていることは間違いない。子供たちも、踊りや歌詞、段取りを間違えてはいけなと、しっかりとノートを取って皆で練習したと言う。

なお、その時にある少年からノートを貰い受けてきたが、その中には「十枝香」、「盘古玉封」、「采花調」、「十盞灯」、「送字」、「包公插花」、「遠看新庄」、「喜春春」、「全家福」、「忠孝花木蘭」、「双鎖山」、「鯀繡荷包」が書かれている。総じて正月に関わるめでたい文辞で飾る歌、数え歌が多いようである。数え歌に関しては、敦煌文献でも「十二時」、「百歳篇」、「五更転」などが見られており、そうした系譜の中にあると考えられそうである。

そのうちの「十盞灯」を紹介すれば以下のようである。

正月十五的灯展開呀，二位皇娘娘觀灯来呀。

觀了頭盞，觀二盞，一盞一盞觀分明。

一盞灯什么灯？洛陽橋上呂洞賓，洞賓要喝三杯酒，連喝三杯醉醺醺。

二盞灯什么灯？二郎爺担山在空中，這才是二郎爺顯神通。

三盞灯什么灯？兄弟三人哭紫荊，三人哭活紫荊樹，哭活紫荊葉兒青。

四盞灯什么灯？桃園結義四弟兄，不知弟兄名和姓，劉備關張、趙子龍。

五盞灯什么灯？楊五郎出家在山中，王祥臥冰是真心，一梅花。

六盞灯什么灯？南斗六郎六盞灯，兵門外交外娘親。

七盞灯什么灯？北斗七星七盞灯，西天取經數唐僧。

八盞灯什么灯？楊八郎番邦要招親，這才是楊家八兄弟。

九盞灯什么灯？九天仙女九盞灯，十地閻羅九盞灯。

十盞灯什么灯？万歳爺金殿挂龍灯，這才是万歳爺連吳灯。

是十地閻羅灯，九天仙女灯，八仙慶寿灯，北斗七星灯，南斗六郎灯，五把諸侯灯，四郎投堂灯，三戰呂布灯，二郎担山灯，一盞灯来灯一盞，二郎担山兩盞灯，三戰呂布灯三盞，四郎投堂四盞灯，五把諸侯灯五盞，南斗六郎六盞灯，北斗七星灯七盞，八仙慶寿八盞灯，九天仙女灯九盞，十地閻羅十盞灯。

この歌では、神仏や後に神として祀られるようになった歴史的人物と燃灯儀礼の灯籠を結び付ける一種の覚え歌にもなっている。まさに灯籠をかざして踊る秧歌にふさわしい内容に思える。

2. 通渭の皮影戲

社火の調査の中で、皮影戲の調査も行った。ただ調査時に夜間に行われる現場での調査ができなかったので、主に皮影戲芸人や地元農家への聞き取りが主となった。そうした中で碧玉郷在住の皮影戲芸人何青章氏から「撒金錢（迎神）」と「送神」を実演していただき、記録することができた。以下にその聞き取りとその内容につき整理しておくことにする。

聞き取りに拠れば、この地の皮影戲は土地の重要な年中行事の一部となっていて、土地の廟会（神事）を取り仕切る村人たちの意思によってとり行われ、必要に応じて芸人に上演を依頼するという形式をとっていたと言う。また、本来娯楽を目的として上演されるものではなく、芸を神に奉納し神を喜ばせるための神事として認識され、「大戲（廟会）」、「跳神」と同列にあげられるということだった。廟会はその年の天候や農作物の多寡にもかかわる村人たちの重大関心事であり、葬儀の場合などと同様で、自然や神への畏れの気持ちが強く、儀礼としての変化の幅は一般的に言えばあまり大きくはないと見られる。土地の老人の言によれば、演目から儀式のすすめ方に至るまで、子供の頃から現在まで全く変化はないといい、その老人もその祖父から同様のことを伝えられていたという。その言葉のままであれば、目的や大枠での信仰など、基本的な部分において、伝統的形式がかなり色濃く残されていると考えてよいかもしれない。

その儀礼を始めるにあたって、まず日程を定めることになるが、その際にも村の陰陽先生（占い師）の占いによって吉日が選ばれることになる。この為、上演日は毎年定まっている訳ではないとのことである。

このように日程が定められ、そこではじめて皮影戯芸人に依頼される。皮影戯芸人はおおむね近隣村落の農民で、農閑期に 5 人くらいで一つの「皮影班」を作るとされる。上演当日に会場に集まり、舞台の準備を始めるということで、会場は、個人宅の庭、学校のなか（集会場を兼ねている学校では、皮影〔影絵人形〕に用いる舞台をそなえているところもある）など、おおむね各村で定められた場所があるが、それもその時々で変わるとのことである。

舞台の設定は、まず舞台の正面に白い布の幕（スクリーン）を張り、幕の後に「亮子」（明かり）を用意する。以前は油を使ったランプを使用していたが、ここ数年より明るく安定した明るさを保つことのできる電灯が使用されるようになったという。電灯とスクリーンの間には皮影を操作する芸人の席を設け、その脇にはテーブルをおき、テーブルの上には皮影を掛けておく紐を 2 本ほど用意しておく。舞台の後方は楽器演奏者用の席として 2 列の長椅子を用意する。前列は二胡奏者と板胡奏者、後列は鼓鑼奏者と鎖呐奏者となるのが一般とのことである。

全ての用意が整い、夜 7 時半になると儀式が始まる。

儀式の始めは「迎神」とそれに合わせて演じられる「撒金銭」である。通渭では各郷の社でそれぞれ異なる神を供養するが、この迎神では、その神の像や位牌を廟から「臨時の廟」となる舞台の正面に勧請する。迎神の作法では、皮影戯芸人たちと村の長老 2、3 人が神像や位牌を迎えに出るが、参列者は楽器の演奏、爆竹などでこれを迎える。そして皮影戯の舞台正面に神々を勧請しおえた後で、村人たちの焼香がおこなわれ、そしていよいよ皮影戯が始まる。

皮影戯のはじめに演じられるのは「撒金銭」である。これは名称も内容も通渭県内の村々では全く同じとのことである。内容は、まず舞台上に童子役の皮影が登場し、発声によって儀式の始まりを宣言し、儀式の意図、日時と儀式をおこなう地点を読み上げる。そして勧請される神々のなまえを呼び上げる。

2002 年の調査時に碧玉郷で収録された内容をもとに文字化すれば、その「撒金銭」の内容は以下の通りである²³。

哦～嗨！宝蓮台来宝蓮台，宝蓮台上宝花開。

哦～！上方知識童子欲出南天門，出来○○横眼一觀，哦！嗨呀，茲有甘肅省通渭縣碧玉郷，迎接完和聖人等，於本方和各位諸神，設下了灯花大会呀。恭請各位諸神登壇赴会。阿彌陀仏。

大羅三清三境三宝天尊、厚天之主。金闕玉皇上帝、天帝、三靖十方万靈正帝，一声請～啊。阿彌陀仏。

灯花会上升香煙啊，升香煙啊。阿彌陀仏。

万花教主、玄天上帝、七曲文昌宏仁正帝、洛河○○高明大帝、大上三万三清三觀大帝、齊天大聖、八王將軍、十方、三界、西天大帝，一声請～啊。阿彌陀仏。

灯花会上升香煙啊，升香煙啊。阿彌陀仏。

十行正兩王大靈觀內盟主降主大元帥 本天城隍、感応灯神、風中○○、九刹、山神、○○、八方、九神、灯元靈域、諸大龍王，一声請～啊。阿彌陀仏。

灯花会上升香煙啊，升香煙啊。阿彌陀仏。

十天太歳、冥間灯（等）神、山神土地、米月灯神、牛王、馬王、水曹大王、一声請～啊。阿彌陀仏。

灯花会上升香煙啊，升香煙啊。阿彌陀仏。

東出太陽司命照君、○○○○、一切高真、千真万真、万真千真，一声請～啊。阿彌陀仏。

灯花会上升香煙啊，升香煙啊。阿彌陀仏。

【和訳】

さて、宝蓮台や宝蓮台、宝蓮台上にはまさに宝花が開かんとしております。

お～！上方の知識童子が南天門を出んとして○○横眼に一たび観るや、お～、ここ甘肅省通渭縣碧玉郷に、まさに本方に諸神各位をお迎えして、灯花大会を開こうとしております。恭しくも諸神各位は登壇して

会に赴かんことを。あみだぶつ。

大羅三清三境三宝天尊は、厚天の主。金闕玉皇上帝、天帝、三靖十方万靈正帝、声にあげてお迎えしましょう。あみだぶつ。

灯花会にお香の煙が立ち上る、立ち上る。あみだぶつ。

万花教主、玄天上帝、七曲文昌宏仁正帝、洛河○○高明大帝、大上三万三清三觀大帝、齊天大聖、八王將軍、十方三界 西天大帝、声にあげてお迎えしましょう。あみだぶつ。

灯花会にお香の煙が立ち上る、立ち上る。あみだぶつ。

十行正両王大靈觀内盟主降主大元帥、本天城隍、感応灯神、風中○○、九利、山神、○○、八方、九神、灯元靈域、諸大龍王、声にあげてお迎えしましょう。あみだぶつ。

灯花会にお香の煙が立ち上る、立ち上る。あみだぶつ。

十天、太歳、冥間灯（等）神、山神土地、米月灯神、牛王、馬王、水曹大王、声にあげてお迎えしましょう。あみだぶつ。

灯花会にお香の煙が立ち上る、立ち上る。あみだぶつ。

東出太陽司命照君、○○○○、一切の神々、すべての尊格は間違いなく、声にあげてお迎えしましょう。あみだぶつ。

灯花会にお香の煙が立ち上る、立ち上る。あみだぶつ。

（○で示した箇所は聞き取りできなかった箇所である。以下同じ。）

実のところ、方言ということもあり、また神々の中でもあまり聞き慣れない不明な名称が多いが、そのまま記録してある。

ここで興味深いことは、「宝蓮台」として、仏教の浄土への往生を想起させる名称を使用していること、「知識童子」という『華嚴經』『入法界品』を想起させる「童子」が登場すること、「牛王、馬王」のように勧請される神々の中に仏教由来の神が多くみられること、また阿弥陀仏の名号が唱えられることなど仏教的要素、浄土信仰的要素が色濃くみられることであろう。台詞や讃文の合間に仏の名号が唱えられることも敦煌文献 P.2066、P.2250 などの『浄土五会念仏誦經觀行儀』でもよく見られることで、その影響を受けた変文類でも珍しいことではない²⁴。

知識童子が出ようとする「南天門」は中国神話に言う天庭（天上界）の南門（正門）で、とくに『西遊記』、『封神演義』などの小説類によく見られている。大羅三清三境三宝天尊（大羅天にいる道教の最高神三清（玉清聖境無上開化首登盤古元始天尊、上清真境玉晨道君靈宝天尊、万教混元教主太上老君道德天尊））や金闕玉皇上帝（金闕至尊玉皇上帝、いわゆる玉皇上帝）など、道教の最高神がこれに混在していることは、民間において仏道が完全に混淆している状況を呈している。伝統的な仏教の儀礼作法と一致するところを多く残しながら、勧請される神々の多くが土地の神や道教の神であることは、中国民間ではよく見られることではあるが、信仰の融合が現れているという点でたいへん興味深い。古く敦煌でも類似する仏道の混合形式は見られているが、登場する神々がその時代ごと、その土地ごとに適宜変更されているという点では、信仰の変遷を考える上で重要で、さらに調査を進める余地がある²⁵。

なお、標題となっている「撒金錢」というのは「お金を撒く」くらいの意味であろうから、神事、廟会の儀礼に見られるのは不思議に思われるかもしれないが、しかし宗教儀礼であっても、布施を得ることは重要であり、隋唐の時代から儀礼によって布施を求めることに関する記載は数多く見られている。例えば『統高僧伝』『宝巖伝』に言う。

巖之制用随状立儀，所有控引，多取『雜藏』、『百譬』、『異相』、『聯璧』，觀公導文、王孺懺法、梁高、沈約、徐庾、晋宋等数十家，包納喉衿、触興抽拔。每使京邑諸集，塔寺肇興，費用所資，莫匪泉貝，雖玉石通集，藏府難開，及巖之登座也，案幾(机)顧望，未及吐言，擲物雲崩，須臾坐没。

（宝）巖の制用は状に随ひて儀を立て、控へ引く有る所、多く『雜藏』、『百譬』、『異相』、『聯璧』、觀公の導文、王孺の懺法、梁高、沈約、徐庾、晋宋等の数十家を取り、喉衿を包み納め、興に触れては引き抜す。京邑にて諸を集め、塔寺興さんと肇らしむる毎に、費用の資る所、泉貝にあらざるなく、玉石通集し藏府開き難しと雖も、巖の登座するに及ぶや、案机に顧望し、未だ言を吐くに及ばざるに、擲つ物雲のごとく崩れ、

須臾にして坐没すなり。

『続高僧伝』卷第三十『宝巖伝』十二

宝巖は状況に応じて巧みに説法を行える人物で、常に經典や名著の梗概となる部分を書き抜き持っていて、状況に応じてそれらを用いて人々を説いて回る人気のある僧侶だった。都などで寺塔を建立するのに金銭が集まらないことはなかったが役所がそれを放出しない時など、宝巖が説法の場に向いて行って登座するや、言葉を発する前に座を埋め尽くし崩れるほどの寄進があったという。「擲物雲崩」という表現は何か無造作な感じもあるが、「雲崩」という表現からは雲のごとく沸き崩れる「喜捨」があったと見ればよいのであろう。このような仏事の前に寄進が集まる光景は、『高僧伝』類に多く見られている。

また 10 世紀頃の敦煌文献 S.2073「廬山遠公話」という話の中にも類する表現が見られている。儀礼の前のお布施を求める段のように考えればよいと思われる。

須臾之間已至，相公先遣錢二百貫文，然後將善慶來入寺內。其時聽衆如雲，施利若雨，鍾（鐘）声既動，即上講，都講拳〔□〕，維那作梵，四衆瞻仰，如登靈鷲山中。道安欲擬忻心，若座奄（菴）羅會上。於是道安手把如意，身座宝台，広焚無価宝香，即宣妙義，発声乃唱，便举経題云：「大涅槃經如来寿量品第一。開經已了，歎仏威儀，先表聖賢，後談帝徳。伏願今皇帝道応龍駭，……」

須臾の間にして已に至るに、相公先ず錢二百貫文を遣り、然る後に善慶を呼び来りて寺内に入る。その時、聴衆は雲の如く、施する利は雨の若く、鐘声既に動くや、即ち講に上り、都講は(経題を)拳し、維那は作梵し、四衆瞻仰す。靈鷲山中に登るが如し。道安忻心に擬へんと欲し、菴羅会上に座するが若し。是に於ひて道安手に如意を把り、身は宝台に座し、広く価ひ無き宝香を焚き、即ち妙義を宣べんと発声して乃ち唱し、便ち経題を挙して云く、「大涅槃經如来寿量品第一」と。開經已に了り、仏の威儀を歎じ、先ず聖賢を表し、後に帝徳を談る。伏して願はくは今

の皇帝の道は龍駝に応じ……。

ここでも相公に連れられた善慶（実は慧遠）が道安の法会を聞きに出向く場面で、相公はまず寺にはいる前に銭二百貫文を贈っている。さらに「聴衆は雲の如く、施する利は雨の若く」というほど喜捨があるとしているのはまさに「撒金銭」というイメージに近いものであろう。

「撒金銭」はおおむね十二分ほどでおわり、続けてその日演ずる演目が始まることになる。

その演目は、廟会の目的によっても変わるという。皮影戯芸人の何青章氏によれば、皮影戯は、正月、五月五日（端午）、六月六日、七月十二日、八月十五日、十月一日（鬼節）などに、それぞれ三日間にわたって演じられるそうである。皮影戯が正月に限定されるものでないことは言うまでもない。

場所は鶏川郷川道村にある高山廟が通渭県内ではもっとも大きな廟であり、何青章氏はここで演じることが多いということである。

そうした儀礼との関りで、とくに名前が挙がったのは『唐王遊地獄』と『目連僧成聖』という演目である。前者は、唐の太宗が龍王との約束を違えたために地獄に連れ去られ、崔府君の助けによって救われる話で、『西遊記』の一節にもなっている。これはそれよりもさらに前の 10 世紀敦煌文献の『唐太宗入冥記』に見られる話で、この『唐王遊地獄』が単独でか『西遊記』の一節として伝承されたのかは定かではないが、古くから語られた話であることは間違いがない。ここに登場する崔府君の生誕節が六月六日もされており、この日に好んで演じられるのだと言う。この崔府君の生誕節に盛大な催しが行われることは先の『東京夢華録』にも詳細な記載がある。もう一つの『目連僧成聖』は、有名な目連尊者の話で、地獄に落ちた母親を救いに行く話が含まれている。これも実は 10 世紀敦煌文献にはさまざまなバリエーションの目連変文のテキストが見つかっていて、儀礼の中での変文（絵解き語り）としてしばしば上演されたことが知られている。七月十五日の盂蘭盆に関わる説話であり、通渭でも七月に上演することが多いとのことである。

その延長線で引き続き敦煌資料との類似点を述べるならば、10 世紀敦煌でも皮影戯があったことが指摘できる。変文のような絵解き芝居があったこと

はわかっているので、正月の燃灯行事などの夜間行事において影絵劇として行われるようになったと考えても不思議ではなからう。

敦煌文献 S.1316 に言う。

油貳升半充十五夜点影灯用。

油貳升半、十五夜の影灯を点ける用に充つ。

また P.3490 に言う。

油参升付願真燃長明灯及正月十五日影灯等用。

油三升、願真に付して長明灯及び正月十五日の影灯等を燃すに用ふ。

関連する資料はこれ以上のものが見つかったわけではない。ただ、繰り返しになるが変文のような絵解きの台本も多く発見されている敦煌のこともあり、正月の燃灯儀礼などで変文のような講唱文学が行われていたと考えるのが自然なように思われるのである。なお、ここで言う敦煌の燃灯行事についても前掲拙稿を参照されたい²⁶。

ここで敦煌変文と通渭の皮影戲の二者を直接繋ごうと思っているわけではないが、燃灯行事における皮影戲の上演という共通点があることは注目しておきたいと思う。なお、今日の『通渭県誌』の記載に拠れば²⁷、「すくなくとも乾隆期には通渭に皮影戲が流入した」ことが記述されている。これに拠れば乾隆期以前には通渭には皮影戲がなかったかにも見えるかもしれない。ただ、代々皮影戲芸人であった何青章氏の家には、明時代より伝わるという古い皮影が見つかっており、何家の家伝では明代以前にも皮影を演じていたと言われているという。

さて、そうして演じられる通渭の皮影戲では、すべての演目が上演された後に「送神」の作法がある。この作法は勧請した神々を送り返す為の作法である。以下に、2002年3月の調査時に記録された内容を紹介しておく。

各位諸神登壇赴会○○○○壇。灯花大会已完成各位諸神都帰宮

〇〇〇〇、共赴今天晚上灯花大会完満、奉請諸神帰宮。阿弥陀仏。

大羅三清三浄三宝天尊、厚天之主。金闕玉皇上帝、天帝、三靖十方万靈正帝。延寿仏。想也！太聖回聖位。菩薩冥王府。

十行正両王、大靈観内盟主、降主大元帥、本天城隍、感応灯神、風中〇〇、九刹、山神。延寿仏。想也！太聖回聖位。菩薩冥王府。

東出太陽司命照君〇〇〇〇、一切高真、千真万真、万真千真。延寿仏。
想也！太聖回聖位。菩薩冥王府。
各位諸神帰宮、代我叫羅天子。

【和訳】

各位の諸神は登壇しこの会にお集まりくださいましたが、灯花大会はこれで終了いたします。各位の諸神はみな宮へお帰りいただきます。皆さんにお集まりいただいた今晚の灯花大会は無事終了いたしました。恭しくも諸神におかれましては宮にお帰り下さいませ。あみだぶつ。

大羅三清三浄三宝天尊は厚天の主。金闕玉皇上帝、天帝、三靖十方万靈正帝。延寿仏。太聖たちよ聖位にお戻り下さいませ。菩薩冥王府。

十行正両王、大靈観内盟主、降主大元帥、本天城隍、感応灯神、風中〇〇、九刹、山神。延寿仏。太聖たちよ聖位にお戻り下さいませ。菩薩冥王府。

東出太陽司命照君〇〇〇〇、一切の神々、すべての尊格よお間違いないく。延寿仏。太聖たちよ聖位にお戻り下さいませ。菩薩冥王府。

各位の諸神よ、宮に帰り私に代わって（閻）羅天子に宜しくお伝え下さい。

ここで疑問に思われるのが、文の合間に唱えられる名号が、前の「撒金錢」では「阿弥陀仏」のみだったのが、この「送神」では「阿弥陀仏」のほか「延寿仏」、「菩薩冥王府」となっていることであろう。「延寿仏」というのは寿命をつかさどる仏くらいの意味で使用されているものと思われるが、大蔵経類ではあまり見られない名称である。しかし10世紀敦煌文献ではS.2428などに『仏説延寿命経』という擬經典が残され、ここに「延寿菩薩」という名称が見られている。こうした古来の民間信仰が転じたものなのかもしれない。この敦煌本『仏説延寿命経』は、民間信仰の中で大変よく読まれた經典と見

られ、敦煌文献中でも 30 点以上確認されている。民間でよく読まれた經典と併記されることも多く、S.5531 などでは『観音經』、『仏説地蔵菩薩經』、『仏説閻羅王經』などと併写されており、死から逃れたいか或いは良く生きて平穩な死を迎えたいという当時の人々の願いが込められている。この通渭の「送神」部分には最後の段に「各位諸神帰宮、代我叫羅天子。(各位の諸神よ、宮に帰り私に代わって(閻)羅天子に宜しくお伝え下さい。)」の記載も見られ、この儀礼(皮影戲)を行う功德が冥府に届き、自らへの功德、あるいは既に亡くなった人々への追福(追善供養)の意味合いが込められていることがわかる。正月儀礼の中に、こうした預修や追福といった思いが込められているということは、中国では自然な考え方であるが、古くからの信仰や神仏の名称がこうした形で残されていることは大変興味深いことであろう。

まとめ

以上に甘肅省通渭県で見聞した正月行事、社火について紹介しつつ、正月儀礼の流れを歴史的発展の中に位置づけようと試みてきた。調査の部分に関しては、当地での滞在時間は極めて短く、また僅かな調査であるだけに、すべてを紹介しきれていないと思うが、恐らくは消えゆくかあるいはこの先大きく変化するであろう伝統行事を少しでも記録として残せたことは幸いであった。

こうした正月燃灯儀礼を歴史的変遷とともに見てみると、様々な儀礼的な意味合いが層をなすようにこの通渭の社火に残されていることがわかる。例えば燃灯儀礼の魔除け、除災的な意味合いは六朝期以前から受け継がれてきたものである。8 世紀頃から仏教儀礼的色彩が色濃くなり悔過や預修という修身の意味合いが加わり、さらにその後には追福といった意味合いが加わるのであるが、そうした意味合いの多くが層をなすように通渭の社火には受け継がれているのである。また社火の名称の由来として、先秦以来の儺戲や土地神信仰と結び付ける研究が多いが、より実態に即した考え方として宋代前後の「社」の成立と燃灯儀礼の関係があることも本稿において触れることができた。

ここに改めて思うことは、こうした民俗調査は、文学、歴史研究に数多く

の示唆を与え続けてくれているということである。こうした歴史的変遷という角度から見た場合、中国に伝承される行事の研究にはまだまだ検討すべき課題が残されていると思う次第である。

(2002 年 4 月初稿執筆 2008 年 3 月加筆

2020 年 1 月修訂 2021 年 1 月補訂)

注

* 本稿は 2002 年 3 月と 2008 年 2 月に行ったフィールド調査の折にまとめた報告書を編集したビデオ資料をもとに、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B) 16H03404「9、10 世紀敦煌仏教、道教、民間信仰融合資料の総合的研究」(2016-20 年度)の研究成果として再整理したものである。なお編集された video は YouTube (太史閣チャンネル、通渭社火_中国農村伝統行事、<https://www.youtube.com/watch?v=1VVE-mHZV00>)において 2021 年 11 月 8 日より公開しており、本稿とビデオ資料を併せて参照できるといふ新たな研究成果発表の形を試みている。

¹ かつて調査が行われた時には、通渭は交通の便が極めて悪く甘肅省内でも特に貧困問題を抱えていた。しかし 2017 年 7 月には高速鉄道宝蘭線(宝鶏-蘭州間)の通渭站が開業し、地域の伝統文化も一変している。なお、筆者たちが調査したのとはほぼ同じ時期に中国の作家賈平凹も通渭を訪れ、「通渭人家」という一文でその強く残った印象を記している。『美文』2002 年第 1 期、71-77 頁。

² 宋・范大成(1126-1193 年)、『上元紀吳中節物』や同じ宋・孟元老『東京夢華錄』「六月六日崔府君生日二十四日神保觀神生日」に記録が残されている。なお、中国の研究では陳榮「社火淵源新探」(『中国土族』2005 年春季号、40-43 頁)、李智信「社火溯源」(『青海民族研究』第 19 卷第 4 期、2008 年、117-121 頁)、王強、史民強「民間社火溯源及其体育文化価値」(『体育科技文献通報』第 18 卷第 7 期、2010 年、120-121、131 頁)、王琮「閩中民間社火与宗教祭祀源探」(『河南社会科学』第 20 号第 11 期、2012 年、69-71 頁)、曾愛娣「“社火”考釈与探源」(『黒竜江史志』2013 年第 16 期、47-49 頁)などにその起源を古代の臘祭、土地神、儺戯にまでさかのぼって考えている。社火にそうした儀礼からの継承があることも事実であろうが、本稿では、宋代に社火という名称が上元の燃灯儀礼との関係で如何に出現し、それが今日に継承したかを考えることを主眼とするため、古代の臘祭、土地

神、儺戯との関係性はそれらの解釈に譲る。

³ 社火における旱船舞に関しては李智信「上古方祭、女媧伝説と社火劃旱船」（『青海民族大学学报(社会科学版)』第38卷3期、2012年、52-60頁）などがある。

⁴ 社火における秧歌舞に関しては張曦旺、楊暢「社火秧歌和灯会“道詩劇”」（『大舞台』芸術双月間、2007年、20-22頁）がある。

⁵ 社火に関しては、近年の論文として、高麗潔『明清時期山西社火研究』（遼寧師範大学碩士論文、2014年）、応雅婧『社火文化視角下的村落公共空間研究』（西安建築科技大学碩士論文、2015年）、王東恵『晋南社火的社会經濟功能探析』（南京師範大学碩士論文、2015年）、呂晶『隴州社火伝承与伝統村落空間保護』（西安建築科技大学碩士論文、2015年）など中国の碩士論文では地域での実地調査の成果が多く見られ興味深かった。とくに応雅婧、呂晶両氏の調査では調査地も比較的近く、土地の情報を詳しく知ることができた。

⁶ 当時の通渭県の映像は YouTube（太史閣チャンネル、通渭社火_中国農村伝統行事）動画を参照。

⁷ 前掲 YouTube 動画 04:47 以降。

⁸ 本研究は、筆者が敦煌の儀礼研究の中で長く関心を持ってきた問題だが、長く整理する機会を持たずにいた。しかし思わぬところで、NHK エデュケーショナルのプロデューサー角野史比古氏から「奈良東大寺お水取り」との関連による問い合わせを受け、それに答える形で成稿化が始まったのである。関連する敦煌の燃灯儀礼については「唐五代敦煌における正月の燃灯儀礼」（『敦煌写本研究年報』第16号、京都大学人文科学研究所、2022年）として刊行される。角野氏と角野氏をご紹介くださった国立歴史民俗博物館松尾恒一教授、番組に関わられた方々にはあらためて感謝申し上げる。

⁹ 前掲李智信（2008）、曾愛娣（2013）では社の起源を先秦時代の土地神と混同している。組織から見た場合、筆者の言う10世紀の社とは異なるのでここではこれに拠らない。

¹⁰ 女人社については拙稿「敦煌文献より見た唐五代の女性を取り巻く社会環境」（『近代東アジアと日本文化』、銀河書籍、2020年、505-548頁）参照。また女人社に関する研究には、筆者拙稿のほか、寧可、郝春文「北朝至隋唐五代間的女人結社」（『北京師範学院学报』1990年第5期、16-19頁）、黄霞「北図蔵敦煌『女人社』規約一件」（『文献』1996年第4期、263-266頁）、黄霞「浅談晚唐五代敦煌『女人社』的形態及特点」（『北京図書館館刊』1997年第4期、88-92頁）、楊森「晚唐五代兩件『女人社』文書札記」（『敦煌研究』1998年第1期、65-74頁）、鄧小南「六至八世紀的吐魯番婦

女——特別是她們在家庭以外的活動」（『敦煌吐魯番研究』第4卷、北京大学出版社、1999年、215-237頁）、余欣「唐宋敦煌婦女結社研究——以一件女人社社条文書考證為中心」（『人文学報』(325)、東京都立大学人文学部、2002年、177-200頁）などがある。

11 『范石湖集』卷第二十三、上海古籍出版社、1981年、326頁。

12 前掲拙稿「唐五代敦煌における正月の燃灯儀礼」参照。

13 本資料は前掲拙稿「敦煌文献より見た唐五代の女性を取り巻く社会環境」において図像とともに全文を録している。詳細はそちらを参照のこと。

14 印沙仏とそれに関わる行事などに関しては、藤枝晃「印仏・印沙仏——パリと奈良との仏教版画展から（上）」（『日本美術工芸』(480)、1978年、15-22頁、図8-11頁）、同（中）（『日本美術工芸』(481)、1978年、15-25頁）、同（下）（『日本美術工芸』(482)、1978年、15-23頁）、譚蟬雪著、劉永増訳「印沙・脱仏・脱塔」（『史学論叢』第21号、1990年、1-21頁）、「正月燃灯」「印沙仏会」（季羨林編『敦煌学大辞典』、上海辞書出版社、1998年、434頁）、譚蟬雪『敦煌民俗』（甘肅教育出版社、2006年、47-52頁）を参照。

15 宋・孟元老『東京夢華録』「六月六日崔府君生日二十四日神保観神生日」。なお、『東京夢華録』の内容に関しては入矢義高、梅原郁著『東京夢華録』（岩波書店、1983年）には詳細な訳と、静嘉堂文庫所蔵元刊本『幽蘭居士東京夢華録』が図版として掲載されおり、本稿ではこれを参照した。なお、百戯の詳細については同書でも不詳とされるものがある。

16 社火と儺戯の関係については前掲陳栄（2005）、王強、史民強（2010）、などにも指摘がある通りである。

17 社火と土地神祭祀との関係は前掲李智信（2008）、王琮（2012）などにも指摘がある通りである。

18 詳細は前掲拙稿「唐五代敦煌における正月の燃灯儀礼」参照。

19 こうした正月の燃灯行事、踏歌などとの関係については前掲拙稿「唐五代敦煌における正月の燃灯儀礼」参照。

20 前掲動画では、「艗公」役の人は麦わら帽子に黒いサングラス、大きな赤いマスクといういでたちで、張り子の舟の中の「船娘子」と一緒に踊っている。

21 前掲動画では、黄色の衣装の人物が毬をもって獅子とともに踊る。獅子は中国で一般に見られるものと同じで、前足と後ろ足役の二名で操作し、暗闇の中で、また狭い空間の中であつてもかなり激しい動きで聴衆を喜ばせていた。

22 前掲拙稿「唐五代敦煌における正月の燃灯儀礼」参照。

²³ 前掲 YouTube 動画 04:47 部分。文字起こし作業では同地域の方言に明るい趙麗苒（広島大学人間社会科学研究科博士前期課程学生）及びご尊父の趙偉氏の協力を得ている。

²⁴ 筆者拙稿「S.2204『(擬)董永変文』再考」（『敦煌写本研究年報』第 15 号、2021 年、1-15 頁）参照。

²⁵ 元曲に見られる民間信仰の神々、とくに城郭都市や郷村市場地での社火で祭られた方祀の神（地方神）と宗族演劇に登場する吉神について研究した論考として都通憲三朗「元曲に登場する民間信仰の神々」（『仏教経済研究』通号 47、2018 年、1-24 頁）がある。

²⁶ 前掲拙稿「唐五代敦煌における正月の燃灯儀礼」

²⁷ 『通渭県誌』、蘭州大学出版社、1990 年、529 頁。